

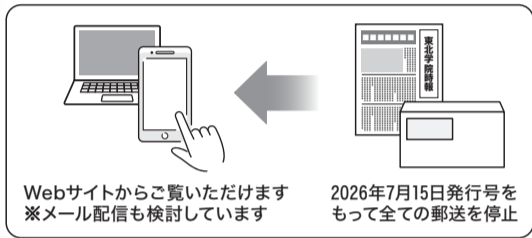
東北学院時報

郵送停止のお知らせ

東北学院時報は二〇二六年七月十五日発行 第七九四号をもちまして、全ての郵送を停止する運びとなりました。

東北学院時報Webサイト https://jihou.tohoku-gakuin.jp/

こちらのQRコードからご覧いただけます



Webサイトからご覧いただけます ※メール配信も検討しています

2026年7月15日発行号をもって全ての郵送を停止

2025年度秋季特別伝道礼拝

大学宗教主任 川島 堅二

「戦後80年に今共に考える戦争と平和」という総合主題の下10月8日、五橋キャンパスで桃井和馬氏(恵泉女学園大学教授)を、9日に土樋キャンパスで油谷茂雄氏(「平和を祈る七夕市民の会」代表)をお招きして特別伝道礼拝の時が持たれました。

桃井氏は「人生は巡礼だ〜スペイン・サンティアゴ巡礼とインマヌエルの神〜」と題し、スペイン西北部の街「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」を目指すキリスト教徒の巡礼に学生たちを引率して参加した経験が話されました。



写真左より岡田勇督准教授、大西晴樹院長・学長、油谷茂雄氏、原田浩司宗教部長

人々と巡礼を通して語り合い、信仰と文化を分かち合うことで得られる「人間の安全保障」についての意識が高いのだということでした。

油谷氏からは仙台の七夕祭りが開催される8月6日は、第二次世界大戦末期に広島に原爆が投下された日であることから、仙台七夕祭りにぜひとも平和を祈る千羽鶴を供したいという市民の願いがどのように形となっていったか、その過程で仙台市民のみならずキリスト教学校の学生、生徒、教職員が関わっていた事実を丁寧にお話いただきました。

戦後80年にふさわしいご講演をいただいたことをお二人の講師に感謝申し上げます。



桃井和馬氏

第24回 東北学院 ホームカミングデー

昨年十月二十五日、第二十四回東北学院ホームカミングデーが土樋キャンパスのラーハウザー記念東北学院礼拝堂で開催された。同日には大祭「六軒丁祭」が行われていたこともあり、多くの同窓生や教職員が集まった。

原田浩司宗教部長の司式による記念礼拝から始まり、続く記念式では大西晴樹院長・学長が、これまでのホームカミングデーを振り返りつつ、今回のトークセッションのテーマ「東北



学院応援歌、今、昔にちなんで、各設置校の運動部の活躍について触れた。森山博同窓会長からの祝辞の後、トークセッションでは、中学校・高等学校と大学



を卒業した鈴木英太氏、鈴木勝博氏、櫛ヶ岡高等学校と大学を卒業した佐々木克典氏が登壇。シンフォニックウインドアンサンブル(通称SWE)監督の小野達雄氏がファシリテーターを務め、登壇者による応援歌の思い出話をはじめ、SWEによる応援歌の演奏も披露された。また、東北学院の三つの応援歌「広瀬の河原」「天地に香る」「行ける歴史か」にまつわるエピソードについて意見が交わされた。

トーク中盤からは、応援団とチアリーディングチームも加わり、高校生・大学生混合

寄付者ご芳名

(2025年10月1日〜11月15日までの寄付者)

◆創立150周年 LIFE LIGHT LOVE 募金

〔東北学院大学アーバンキャンパス 整備事業募金〕

〔団体〕 金100,000円 株式会社高橋

〔個人〕 金50,000円 セメント工業所殿

金50,000円 東北学院同窓会

〔個人〕 金100,000円 石巻市役所TG会殿

金100,000円 渡辺通子殿

金50,000円 川又 憲殿

金200,000円 瀬谷 寛殿

金100,000円 小川政行殿

金50,000円 匿名殿

〔東北学院中学校・高等学校 奨学金募金〕

〔個人〕 金100,000円 赤木長義殿

◆キリスト教伝道者 養成奨学金基金

〔団体〕 金100,000円 日本基督教団

仙台北三番丁教会殿

の「トレフレッチエ」によるパフォーマンス披露や校歌斉唱が行われた。参加した同窓生からは「応援歌を聞くだけで青春時代を思い出すことができた」などの声が聞かれ、盛況のうちに閉会した。

共生社会へ

皆さんはディートリヒ・ボンヘッフアーをご存じでしょうか。二十世紀前半のドイツの牧師・神学者で、ナチス・ドイツへの抵抗運動で知られています。彼はヒトラー暗殺計画に関与し、第二次世界大戦終結の直前に絞首刑で処刑されました。三十九歳で命を奪われた彼の勇敢さは、現在も多くの人の興味を引き付けています。

最近、彼の生涯を題材とした映画『ボンヘッフアー ヒトラーを暗殺しようとした牧師』が公開されました。私にとって最も印象に残ったのは、アメリカ留学から帰国した若きボンヘッフアーが家族と団らんするシーンです。ナチス台頭の話で場が暗くなると、彼は「ナチス? 大したことないだろ」とおどけます。しかし、彼の父親は重たく次のように告げます。「ヒトラーは、ドイツで起こっているあらゆる問題の原因を、ユダヤ人と共産主義者のせいにして支持率を伸ばしているんだ」。事実、ナチスにとってユダヤ人問題は大変便利なスケープゴートとして機能しました。スケープゴートとは、一部の個人や集団を悪者に仕立て上げ、集団の不満の矛先をそらすことです。根拠のない陰謀論に人々が振り回され、約六百万人ものユダヤ人がホロコーストによって大量虐殺されたのです。

現代の日本では、「ユダヤ人の代わりに(外国人)がスケープゴートとして用いられている」ようにです。例えば「外国人の犯罪率が上がっている」といった言説の多くは、ファクト・チェックによって事実ではないことが明らかになっています。政治家は、生活の経済的苦しきなど本来取り組むべき問題から注意をそらすために、「外国人問題」というスケープゴートでっち上げています。これはまるで「ナチスの手口でも真似てみた」と言わんばかりではないでしょうか。

私たちに求められるのは、排外主義的な言説に惑わされず、共に生きるための社会を作ることではないでしょうか。日本人同士にも衝突や葛藤があるように、違いや葛藤は当然存在します。しかし、それを乗り越えて共に生きることが重要です。冒頭の聖書箇所、ガラテヤ書三章二八節でも、パウロは差別を超えた共生を訴えています。当時、ユダヤ人キリスト教徒は、割礼という律法を守らないことを理由に、異邦人を教会から排除しようとしていました。二千年もの昔にも「ルールを守らない外国人がいる!」と叫ばれていたわけですね。私たちはこの二千年前の宗教対立を嘲笑うかもしれませんが、今から二千年後の人類が私たちのことを見たら、なんと言うでしょうか。「ドイツ人もユダヤ人もない」という考えに生きたボンヘッフアーを覚えつつ、現代の日本において私たちに何ができるのかを、一緒に考えましょう。

大学宗教主任 岡田 勇督

聖書のこぼれ

ユダヤ人もギリシア人もありません。奴隷も自由人もありません。男と女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからです。

ガラテヤの信徒への手紙 三章二八節